



桃山学院大学 法学部 教授
松村 昌廣 氏

『激動する世界情勢を読む』

松村 昌廣 氏 プロフィール

略歴 1986年 関西学院大学 法学部 政治学科卒業
米オハイオ大学大学院 政治学研究科修士課程
(修士号取得)
米メリーランド大学大学院 政治学研究科博士課程
(博士号取得)
現在、桃山学院大学法学部 教授、(一社)平和・安全保障研究所 研究委員。
この間ハーバード大学 オーリン戦略研究所 国家安全保障学ポストドクトラルフェロー、米国防大学 国家戦略研究所 客員研究員、ブルッキンズ研究所 北東アジア研究センター 招聘研究員、ヘリテージ財団 アジア研究センター 客員研究員、ケイトー研究所外交政策プログラム 客員研究員などを務める。

（はじめに）

今、日本国内でのウクライナや台湾に関する情報が乱れています。情報の一割くらいがガセネタで、残りの九割もかなり偏ったものになっています。マスコミなどみてれば、BBCやワシントンポスト、ニューヨークタイムズなど、英語で発信される元々の情報の段階で戦争がわかります。

現象面としては、世界で様々なことがあります。アメリカの霸権に揺らぎが出ている理由は、ウクライナ戦争でもコロナでもなく、実は一九七一年にニクソンショックが起きたとき、製造力をベースにしたアメリカの霸権は終わりが見えていたのです。そのままアメリカは八十年代を戦い、同時にソ連との最終決戦をにらみながら、ドイツ、日本と競争しなければならないかつたのです。しかもソ連に勝利するために、アメリカは同盟国である日本、ドイツその他と妥協しなければなりませんでした。結果としてアメリカの経済がボロボロになりました。

しかしアメリカの霸権は終わらず、九十年代に入り、金融業をベースにしたアメリカ霸権パート2が始まっています。ところが二〇〇八年、リーマンショックによって世界的な金融危機が起こり、その流れのままで今日にいたっています。つまりアメリカの霸権は、いつ潰れてもおかしくない状態のまま、ごまかしながら続いているのです。

アメリカの霸権が崩れていくのは、アメリカ人自身もヨーロッパ人も日本人もわかっています。ですかね、それを保たせるのか、あきらめ长持ちさせるのか。今、そのつば

（米国霸権の崩壊の過程）

アメリカの霸権に揺らぎが出ている理由は、ウクライナ戦争でもコロナでもなく、実は一九七一年にニクソンショックが起きたとき、製造力をベースにしたアメリカの霸権は終わりが見えていたのです。そのままアメリカは八十年代を戦い、同時にソ連との最終決戦をにらみながら、ドイツ、日本と競争しなければならないかつたのです。しかもソ連に勝利するためには、アメリカは同盟国である日本、ドイツその他と妥協しなければなりませんでした。結果としてアメリカの経済がボロボロになりました。

冷戦が終結するまでは、ある意味、米ソの二国で賄つていた世界秩序維持のコストは、今はすべてをアメリカが賄わなければならないわけです。

（大局から見た世界秩序の落としどころ）

（大層から見た世界秩序の落としどころ）

（大層から見た世界秩序の落としどころ）

とが起きていますが、事の本質はアメリカの霸権が崩壊を続けていて、それが深刻化していることに付随した現象が起きていると理解するべきです。ですから、いろいろなニュースに接しても、その現象面に惑わされず、それらがアメリカの霸権崩壊とどのように関係しているのか、というふうにみていくと、頭を混乱させずに、すっと見えてくると思います。

十九世紀はパックスブリタニカ時代へと移りましたが、時代は必ずつゝは続きません。現在はアメリカの時代が崩れそうなままで崩れず、続いている状況になっています。問題はこの二十一世紀、どうなつていくのかということですが、いずれ、当然のようにアメリカの霸権は崩壊するという大きな流れで、今の世界の情勢をながめることをお勧めします。

リーマンショックによる世界的な金融危機は経済面の事象ですが、一夜、霸権崩壊の流れが、経済面でも安保面でも起きていることがはっきりしました。アメリカの霸権崩壊というところからみれば、アフガニスタン撤退はアメリカ本土からほど遠い中東での現象とみて、本質的にはワシントン内部の内ゲバです。二〇二一年一月、アメリカの国会議事堂が襲撃されましたが、これはアフガニスタンのような辺境どころではなく、アメリカのど真ん中で起きた事件です。これをみても、アメリカの崩壊を巡る内ゲバ状態がかなり極まっていることがわかります。トルランプがどうだ、バイデンがああだ、フガニスタンのような辺境どころではないのかではなく、崩壊していくことは明らかですが、いつどのようなく形式で崩壊していくのか、つまり、アメリカ霸権崩壊後の世界秩序を、このどちらでイメージするのかという内ゲバでもあるわけです。

アメリカの霸権は、崩壊するのかしないのかではなく、崩壊していくか、もしくはできるだけ早く清算しう内ゲバでもあるわけです。アメリカの霸権は、崩壊するのかしないのかではなく、崩壊していくか、もしくはできるだけ早く清算しう内ゲバでもあるわけです。アメリカが非常に得をしました。そして日本もヨーロッパも含めて、アメリカの霸権に協力した国々と人々、に権力者、利得者は、今の体制が体制ができるだけ保たせたい。しかし、アメリカにしてみれば、コスし

トが大きすぎて、覇権を維持できなくなっています。

第二次世界大戦後、アメリカは一国で世界のGDPの半分弱を占めていました。金保有量にいたっては六割から七割でした。今はどうかといふと、一番新しい統計では、アメリカは世界のGDPの二三%にまで落ちています。軍事費は四〇%超です。世界のGDPの二三%しかないにもかかわらず、軍事費は四〇%超もある。続くわけがありません。ムリヤリ続ければ経済に負担がかかります。実際、負担がかかりすぎているために、中国などに追いつかれようとしているわけです。

普通に考えれば、GDPのレベルに直接（軍事的）・間接の介入コストを合致させていかなければなりません。そして、そのためには同盟国に分担協力させようという話になります。これまでのアメリカの覇権システムの下で平和で豊かにやつてきたアメリカ人、そして先進国人間たちの多くもこれを望んでいるはずです。

ところが実際は、ウクライナではブリンケン国務長官やこの問題の中心になっているヌーランド国務次官といった不オコンの人たちのイデオロギーや思い入れに引っ張られ、その望みとまったく逆のことをしていきます。現実主義的には軍事面での縮

す。世界は今、すでに第三次世界大戦の淵に立っているわけです。今、私たちはそういう危機に直面しているにもかかわらず、米欧は火遊びを続けているというのが現在の姿といえます。

／ロシアについて／

先進国首脳会議のことをG7と呼んでいますが、かつてロシアを入れて、G8であった時期もありました。冷戦後、ロシアもヨーロッパを含めた西側の仲間入りをさせて、みんなで仲良くしましょ、協力し合いまして、G8であった時代もありました。しかし、実際には、ロシアは仲良くする、協力しようといつて、G8であった時代もありました。G8の流れに乗れ、西側の半ば一員として動いてくれるような素振りをしていましたが、こうなると当然、もめごとになってしまいます。

その上で今回のウクライナ侵攻をみれば、もちろん、先に殴ったロシアが悪いに決まっています。ただ、ロシアが強いから武力に訴えたというより、武力に頼らざるえないところまで追い詰められ、万策尽きての侵略であり、実は弱さの象徴であつたと考へたほうがよいと思います。というのは、ロシアがウクライナに侵攻して世界の悪者になつたのは、日本が真珠湾を攻撃して世界の悪者になつたのと形としては一緒だからです。

これを受けて、ロシアはクリミア半島に侵攻して併合し、その次はウクライナの東南部ドンバスで、親ロシアによる自称独立政権をつくらせ、ロシアがそれをバツクアップする形で八年間の民族紛争を続けました。二〇二二年二月二十四日、ロシア軍がウクライナへの侵攻を開始しました。その前の二月十六日から散発的な砲撃は起きていましたが、その数が一気に三十倍にも膨れあがります。ウクライナ側からドンバスの立勢力側への攻撃回数が急増、つまりウクライナの中央政府側が独立勢力を側を挑発したのです。その後で手を引くアメリカの武器供与があつたのですが、アメリカはドンバス地方にロシアの覆面

小再編成をして、崩壊過程に入つているアメリカの覇権をできるだけ長持ちさせることができることが本来の筋であるにもかかわらず、自由と民主主義の美名のもと、巨額の軍事援助をしていきます。逆の方へと進んでしまつて、いるわけです。

今の状況をやめることができないのは、英仏を含めたヨーロッパの国々はアメリカの従属国であり、日本はさらにその度合いが強いため、アメリカを止められる国がないからです。縮小再編成しなければならないのに、無理筋で拡大して間接軍事介入コストが膨れ上がっています。アメリカの債務総額はリーマンショックで最大一京円、公的債務だけでも四千兆円の負債に達しておき、これ以上借金を増やしてはならないのに、またぞろ国債の上限を引き上げようとしています。ますます悪い状態へと動き、末期的な状態になつていているといつても過言ではありません。できればソフトランディングをしてほしいのですが、株価を見てわかるように、このままいけばいつかハードクラッシュをしてしまうというのではないかという懸念がどんどん強くなっています。

対して、典型的な主権国家であるロシアや中国はアメリカの属国になどなりたくありませんから、徹底的に反抗します。実際に、アメリカを一の軍事同盟国です。

世界秩序はしょっちゅう変わるものではなく、何十年、あるいは百年に一度変わるもので、大戦争の後、よくも悪くも勝利した国がつくるものです。今の秩序も、常任理事国の五大国が団結してつくったものであります。今は第二次世界大戦を勝ち抜いた国々の団結が壊れかけている状態です。まだ完全に壊れてはいませんが、これが本当に壊れてしまえば、これが本当に壊れてしまえば、第一次世界大戦、第二次世界大戦のような世界戦争が起ります。ウクライナ戦争がエスカレートし、核兵器まで使われたとなれば、それはもう第三次世界大戦の始まりとなりますが、これが本当に壊れてしまえば、これが本当に壊れてしまえば、第一次世界大戦、第二次世界大戦のようになります。ウクライナはいきなり親欧米路線へと切り替わりました。

これを受けて、ロシアはクリミア半島に侵攻して併合し、その次はウクライナの東南部ドンバスで、親ロシアによる自称独立政権をつくらせ、ロシアがそれをバツクアップする形で八年間の民族紛争を続けました。二〇二二年二月二十四日、ロシア軍がウクライナへの侵攻を開始しました。その前の二月十六日から散発的な砲撃は起きていましたが、その数が一気に三十倍にも膨れあがります。ウクライナ側からドンバスの立勢力側への攻撃回数が急増、つまりウクライナの中央政府側が独立勢力を側を挑発したのです。その後で手を引くアメリカの武器供与があつたのですが、アメリカはドンバス地方にロシアの覆面

方とし、ロシア、中国を他方とするものが見られます。

報道をみれば、ロシアや中国はどちらもない国だというふうに映ります。ですが、これを政治的な秩序云々、国際秩序云々という観点からみれば、アメリカはかなりの無茶をしている状況なのです。

国連についても触れておかなければなりません。形の上では第二次世界大戦後の世界秩序は、国連憲章に代表されています。国連といえば安全保障理事会であり、安保理といえます。拒否権を有した常任理事国の五大国、つまり、もともとは日独伊の枢軸国を戦争で倒した「聯合国」による軍事同盟国です。

経済面でアメリカよりも追い詰められているのはヨーロッパです。ブーチン政権を崩壊させることができれば、ヨーロッパにとつては体制変換という大きな意味があります。しかし、ロシアを制裁すると威勢のよいことをいつていてる西側のほうが大きな傷を受けています。それがヨーロッパの状況です。

たとえばイギリスでは、この間、物価とエネルギーの高騰を主因として二回も首相が交代し、イタリアではボピュリスト政権が誕生しました。既に、ハンガリーにも似たような大衆迎合主義の政権が存在します。これは今まで親米で歩んできたヨーロッパが、親米ではなくなってしまう変化、圧力がかかってきて、いきなり反米にまでは振れませんが、非米とでもいえる方向に振れようとしていることを意味します。そういう意味では、アメリカは今、自分たちの霸権システムを経済的な圧力をかけながら壊しているのであります。エネルギーや食糧をロシアに依存している国、特にドイツはもう疲れ切っているわけです。

短期的には焼け太りをしているアメリカに対し、ロシアに制裁をして一番困っているのはヨーロッパです。エネルギーや食糧をロシアに依存している国、特にドイツはもう疲れ

弊してしまっています。「三十六計逃げるに如かず」で知られる中国の兵法書「三十六計」の中なかに「指桑罵槐（しそうばかい）」という計略があります。桑の木を指して罵っているが、実際に罵っているのは槐（えんじゅ）である。つまり罵っている対象と本当の標的は別であるということです。今回でいえば、アメリカのターゲットはロシアではなく、ヨーロッパなのです。ヨーロッパがアメリカよりも弱ければ、それだけアメリカの地位が安定するのですから、アメリカの覇権維持のためにには、ヨーロッパが人口面でもGDP面でもアメリカ以上にならないよう弱めておかなければならぬ。ヨーロッパだけではありません。ロシアを弱め、ウクライナをボロボロにして、何よりもヨーロッパ全体を弱めていく、つまり、すべてを弱めようとしているのです。長い目でみれば、これはアメリカの覇権システムを潰すことになるのですが、目先はアメリカの得になります。

世界に目を転ずれば、ロシアは西側から孤立している状態です。しかし、西側もグローバルサウスといいますか、発展途上国を含めた世界から孤立しています。実際、西側がロシアを制裁するという声をあげたとき、インド、中国、ブラジル等の国は同調しませんでした。むしろ、同

調しなかつた国のほうが多いのです。ですから、たしかにロシアは西側から孤立していますが、同時に西側は世界から孤立しているのです。これもアメリカの霸権システムがどんどん弱まっている証です。ただしアメリカは、自分でそういうふうに事態を持っていっているのですから、天に唾しているといえます。

典型的にそれが現れているのがサウジアラビアと中国です。最近、サウジアラビアとロシアが接近しています。サウジアラビアは中国「元」やロシアの「ルーブル」で石油を売っていますが、このことはたいへん深刻な話です。

アメリカの世界覇権の支柱の一つは、基軸通貨となつているドルです。一九七一年に突然、アメリカは一方的にドルと金の交換をやめました。ニクソンショックです。その後、ドルは紙切れになつたのですが、それでも世界中で使われているのは、今まで使つていたし、他に代わりとなるものがないからというのが経済学者たちの定説ですが、アメリカとサウジアラビアの協定があつたからだというのが、私たちのような分析をしている専門家たちの常識です。サウジアラビアは世界最大の石油輸出国であり、埋蔵量も多い。そのサウジアラビアが「石油はドルでしか売らない」といえば、当然他の中小産

兵を投入したり、バッジを取つて民衆を装つたりしながらの間接的な軍事介入をする可能性が極めて高いとにらんでいました。

ところが、二月二十四日、ロシアはいきなりウクライナの三方から攻め込んだ。民族紛争のレベルでロシア系住民たちが殺された、だから国境を越えて三方から相手国に軍隊を投入したという筋は、国際法上では正当化できません。その意味ではロシアは悪です。ただしロシア側にしてみれば、そうせざるをえなくなつた。まさに乾坤一擲、真珠湾に攻め込んだ旧日本軍と同じです。それが結果的には大失敗で、ロシアにとつてみれば、いわばアメリカにハメられたのだといいたくなるでしよう。

ハメた側とハメられた側という関係が、ここにみえてきます。

この実態は日本の主要なメディアでは報じられず、ある日突然、ロシアに攻め入られたウクライナは可哀想だというイメージばかりが前面に押し出されていますが、実はそういうことではありません。

一九九〇年代のユーゴスラビア紛争では、セルビア側が一方的に悪くて、ボスニアは悪くないという国際世論になり、セルビアの大統領は戦後、国際刑事裁判所で収監中に死亡しました。ところが後にボスニア側も同じようなことをしていて、要す

るに、目糞鼻糞を笑うの世界であつたとわかりました。

当時、なぜそうなつたのかといふと、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ側がニューヨークにある大手広告代理店ルーダー・フイン社に頼み、徹底的な世論工作をしていましたからです。今回も、ウクライナ政府はアメリカの広告代理店を使い、徹底的な世論工作をしています。そういう構図があるということも見ておかなければなりません。

ユーロスラビアにしろドンバス紛争にしろ、民族紛争にどちらがよい悪いというものはなく、もしもこちらがよくてあちらが悪いと考えてしまっている、信じ込まされているとしたら、すでにプロパガンダにやらされている証です。その意味では、日本圧倒的多数の一般国民は今、プロパガンダに引っかかつてしまっています。

今のウクライナ戦争の戦況も、ウクライナは報道されているほどには優勢ではないし、ロシアもいわれているほど負けてはいない。中間のところで動いているのではないかと思ひます。

本当の事実は報道されてはいるものの、それは断片的なもので、全体的にみればどうなのかといえば、たとえばイスラエルの元情報将校や東戦争に参加したアメリカの元情報報

将校がかなり現実的な分析をしており、インターネットで公開されます。そういうものを読めば、BBCやCNNはかなりのプロパガンダを張っているなと思えてきます。

今回の戦争は、現象面ではウクライナとロシアの戦いですが、大きな意味ではアメリカとロシアの戦争です。そしてロケットを撃ち合つたりしている軍事的な様相こそ毎日報道されています。申し上げているように、全体像としてはアメリカの霸権が崩壊過程にあり、経済力が落ちていてもかかわらず、軍事費の負担割合が増していくため、このままでは長期的には保たないという構造のなかで、今のウクライナ戦争がある、つまり、ウクライナ戦争は経済の問題なのです。

その意味で考えれば、ゼレンスキー大統領は火遊びをしているだけということになります。たくさんの軍事物資をもらひながら戦つていますが、このままロシアを追い詰めていけば、ロシアは必ず核兵器を使用します。

軍事援助をしているアメリカもヨーロッパも火遊びをしているのです。バイデン大統領も核兵器を使うような事態になつてはならないといながら、ウクライナに軍事援助を小出しに出し続けロシアを追い詰めします。

なのですが、では、「共同富裕」というものは馬鹿げた政策なのかといえども、そうでもありません。わたしたちの理解とはかけ離れています。が、これは中国においては極めて民主的な政策なのです。素晴らしいとはいいませんが、それはそれで理にかなっていますし、中国という社会で考えれば、一定の持続性は持つでしょう。

十三億人は配つてもらう立場ですから共同富裕策を歓迎しますが、富裕層は反対です。実際、大都市に住む富裕層はものすごく反発しています。少し前、ゼロコロナ政策で閉じ込められていた都市民たちが各地で一斉に反対運動を起こしました。これは共同富裕策に対する反発の、ひとつ現れです。コロナが直接のトリガーになつていますが、背後には自分が得たものを政府にもぎ取られるという不満がある。しかもその不満、反発がかなり膨れ上がつていて、コロナをきっかけとして一気に噴き出しそうになつた。ゼロコロナに対する市民たちの抗議デモには、そういう一面があるわけです。

今まで中国では暴動がたくさん発生しています。ただ、それらは半ば順番に起きていて、今回のように一斉には起こらなかつた。順番に起きているのなら、いくら暴動が発生しても大丈夫です。しかし一斉に発

生したとなれば無理です。人民解放軍の総兵力は二百万人（その内、陸軍は約百万人）です。武装警察は八十万人（実働部隊五十万人）と世界最大の規模のものを持っていますが、各地で一斉に蜂起されたとなれば抑えようがありませんし、その処理を間違えれば今の体制は確実に潰れます。果たしてそういう事態を避けられるのかどうかは中国の大きな課題です。もしも避けられないとするなら、中国は分裂すると思います。分裂して安定化するとは思えませんが、とりあえずは崩れ落ちていきます。

から、もつと恐ろしいことになるに決まっています。統一された強い中国の脅威だけを考えてはならない、くて不安定な中国は、それ以上に怖い存在になります。

「さいごに」

これまでの話を踏まえた上で、最後に日本はどうすればよいのかということに触れていくことにします。

日本は、百年ぶりに「正義の味方」の側について、岸田総理も先頭になつて旗を振っています。気持ちはわかりますが、ロシアの現況を考えれば単純すぎるような気がします。どこかで手打ちをするとき、日本にできることがあればよいのですが、日本はアメリカの従属状態にあります。日本のリーダーも政治的な主張はなかなかできないはずです。

ただ、ひと筋の光はあります。口ではロシアを批判しながら、日本はそれほどの制裁をしていません。元々日ロはそれほど大きな貿易関係国ではありませんから、制裁といつてもシンボリックなものに過ぎません。サハリンの天然ガスにしても関りは続いている。表面的な主張に比べて、やつていることはかなり現実的です。ただし、日本は西側の体制からもはや離れられないという問

それが今、サウジアラビアが石油をループルや人民元で売っている。アメリカは自分で覇権を弱めているわけです。先般、バイデン大統領がサウジアラビアを訪ね、人民元やループルで石油を売らないでくれといいましたが、適当にあしらわれてしましました。サウジアラビアはもうアメリカの言葉を聞かなくなっています。

～中国について～

アメリカと真剣に対峙している中国とロシアですが、中国は、鄧小平以来、改革開放路線をとり、アメリカと仲良くやってきました。冷戦時代もソ連の敵は中国だから、敵の敵は味方になるという理屈でアメリカも中国に対してよい顔をしてきました。

～中国について～

くつたものはアメリカ、日本、ヨーロッパその他に売る。そうして中国はここまで大きくなつてきたのです。が、この状態はもう続きません。なぜなら、アメリカも日本もヨーロッパも、これまでのようにならぬ進出をして中国で工業製品をつくろうとはしなくなつてゐるからです。

中国はかつては十数%もの高度経済成長を記録しました。あるいは八%の経済成長を保ち続けなければ、中国では失業率が高くなり、暴動が起きるといわれ、八%の成長率を続けることが命題のようになつて、いましたが、今や中国の経済成長率は二%にまで落ちています。それも中国の公式の統計ですから、実際にはマイナス成長になつてゐる可能性も高い。

結論的にいえ、もう中国は先進国にはなれません。発展途上国が先

たとえばひと擧げると、今年から中国の人口は減り始めています。今後さらなる少子化となつていきます。つまり、中国は豊かになる前に老齢化してしまう。「中進国のワナ」にはまつてゐるわけです。

そのなかで、少し違つた様相がみえ始めており、これまでのようになつてつくりまくら、海外に売りまくつて儲けるという形ができなくなりますから、当然の結果として内向きの経済になつていきます。

北京、上海のような沿岸部の大都市には一億人ほどの富裕層がいると思ひますが、残る十三億人はそうではありません。習近平は「共同富裕」という政策をとり、監視社会でガチガチに縛り、一億人の富裕層の財産を召し上げて、残る十三億人の低所得層に配ろうとしています。

長期的には、そんなやり方では全体としてより貧しくなつていくだけ

石油国もそれになびき、産油国のほとんどがドルでしか石油を売らなくなっています。

なぜそういう協定が生まれたのかといえば、アメリカがサウジアラビアの軍事安全保障を一手に引き受けたからです。「サウジアラビアはアメリカが守る。だから石油はドルでしか売るな」ということが、今のアメリカの経済覇権の一一番大きな柱であり、二クソンショック以来、ドル

たが、風向きが変わったのはトランプ前大統領のときです。米中は歌舞伎の大立ち回りのような貿易戦争をやり合い、これまでバラ色だった米中の協調関係は政治的にハツキリと終わりました。中国が高度経済成長を続けていくことを前提とした米中の関係はもう存在しません。

日本が出したカネをアメリカに持つていき、それをファイナンスして中国に投資する。中国はそのサイ

進国へと成長していくには、若年労働者層が厚く、人口も増大し、労働力も安いという条件があり、それをうまく使いながら産業構造を変えていく。そしてそのときに社会インフラも整備し、年金などの福祉制度もつくっていく。そうしながら、やがて社会全体が老いていったとき、成熟した先進国になるといわれていますが、中国はもう、この発展経路から外れています。

俱楽部だより



安全祈願祭風景

二月七日(火)十一時から屋上「宣光稻荷大明神」にて会員、俱楽部利用者および俱楽部関係者の安全を祈つて中央電気俱楽部、テナント、(株)メディサス(株)ケービードエスおよび工事関係者約四十名が列席し安全祈願祭が実施されました。

本年も安全祈願祭を実施!

会員の皆様には、会員増強にご協力いただきありがとうございます。

当俱楽部の発展のためには、会員企業の皆様そして個人会員の皆様の新入会員のご紹介が何よりも大切です。

「明るく、親しみのある俱楽部」として会員皆様に俱楽部ライフを楽しんでいただき、大切な交流の場として活用いただけるよう事務局一同頑張つてまいりますので、何卒お力添えのほどよろしくお願ひいたします。

ご入会希望の方には、事務局がいつでもお伺いし、ご説明いたしますので、ご紹介の方よろしくお願いいたします。

(会費・入会金)

区分	会員区分	
入会金	指定会員	1社(団体) 7万円 新規入会 3万円 会員歴あり 2~5年未満 1万円 5~10年未満 5千円 10年以上 無料
	個人会員	一律 5,000円 毎月払い 4,300円 半年払い 4,050円 年一括払い 3,800円
	指定会員	一律 5,000円 毎月払い 4,300円 半年払い 4,050円 年一括払い 3,800円
月額会費 会員一名	個人会員	



(五階ホールのグランドピアノ)
専門スタッフが、会場設営、また機材のご利用説明を致しておりますので、安心してご利用ください。

ご利用後の会議室の消毒の実施も継続致

するかも知れません。そうなれば、
もうひとつは、安保三文書の問題です。安保三文書の中身はよいとしても大きな問題があります。わたしたちは防衛費を1%から2%へ増額し、軍拡をしていきます。軍事支出で世界第三~四位の軍事大国になります。ところが三文書では「これまでの防衛政策の延長戦で」とい、平和国家のままであるとなつてあります。岸田首相がバイデンは倍増した防衛費で何をしていくのかということに触れていないのです。つまり、戦略なき軍拡です。相手からみれば、これは単なる挑発です。戦略があるなしというよりも、アメリカに迫られ、アメリカのいう通りにやりましたという体です。昨年五月に岸田首相がバイデンもなく、ただ軍拡をしただけ

講演録 激動する世界情勢を読む

CLUB GRAF くらぶ・ぐらふ

◎午さん会(10月7日)
『日本経済再浮上の鍵となる財政・金融はどうあるべきか』

産経新聞社 特別記者・編集委員兼論説委員 田村 秀男氏

◎午さん会(10月14日)
『現在の紛争に対応できる我が国の防衛のための「情報・装備とは』

ジャーナリスト 山田 敏弘氏

題はあります。
もうひとつは、安保三文書の問題です。安保三文書の中身はよいとしても大きな問題があります。わたしたちは防衛費を1%から2%へ増額し、軍拡をしていきます。軍事支出で世界第三~四位の軍事大国になります。ところが三文書では「これまでの防衛政策の延長戦で」とい、平和国家のままであるとなつてあります。岸田首相がバイデンは倍増した防衛費で何をしていくのかということに触れていないのです。つまり、戦略なき軍拡です。相手からみれば、これは単なる挑発です。戦略があるなしというよりも、アメリカに迫られ、アメリカのいう通りにやりましたという体です。昨年五月に岸田首相がバイデンもなく、ただ軍拡をしただけ

各論的には、やるべきことをやるという方針を打ち出していますから、評価できるところもありますが、全体的には危機感を感じます。米中戦争になれば、日本はその最前線国家になります。一方的にリスクを背負い込むのは日本です。アメリカは後ろで掛け声をあげ、カネと武器を内容です。

(令和五年一月二十七日 講演抄録文責在記者)

ノーランドと中国はたしかに怖い存在者の会談をしました。その結果としての安保三文書には今日お話ししている全体の構造がみてきません。アメリカの覇権が崩れているなかで日本をどのように位置づけていくのかと、いうことがなく、そしてそのなかでどう動いていくのかというビジョンもなく、ただ軍拡をしただけ

です。しかしわたしたちにとつての一番の問題はアメリカです。そのこととに気付きましょうということが、今日のわたしのお話です。

◎絵画部(水彩画)教室

二月度(一日・水曜日)の画材は、「静物・花」でした。



二月度(一日・水曜日)の画材は、「静物・花」でした。

◎ゴルフ部

一月二十五日例会は、荒天のため中止になりました。

一月三十一日の委員会で、令和六年二月までの競技予定を決定しましたのでご案内いたします。

令和五年二月から令和六年二月競技予定

回数	月日	競技場所
第五六〇回例会	令和五年三月二十三日(木)	茨木国際GC
第五六一回例会	四月十八日(火)	伏尾GC
第五六二回例会 (旧理事長杯取扱) チャンピオンシップ	五月十日(水)	琵琶湖GC
第五六三回例会	六月十四日(水)	大阪GC
第五六五回例会	七月五日(水)	泉南GC
第五六八回例会	八月一日(水)	茨木高原GC
第五六九回例会	九月二十日(木)	花吉野GC
第五七〇回例会	十月十九日(木)	GC四条畷
第五七一回例会	十一月三十日(火)	鳴尾GC
第五六八回例会	十二月十九日(火)	宝塚GC ひろのコース
第五六九回例会	一月二十五日(木)	令和六年一月二十五日(木)
第五七〇回例会	二月二十一日(水)	茨木国際GC
第五七一回例会	三月二十八日(木)	田辺GC

- ◎囲碁部 例会(一月四日)
成績
三勝五段 井垣文男君
二勝四段 廣川強士君
(参加者 四名)
(次回例会は三月十一日(土)指導なし)
- ◎将棋部 例会(一月二十五日)
一月の例会は、休会致しました。
(次回例会は三月二十五日(土)指導なし)

◎俳句部

第八百四十六回 いなづま句会

俳誌「かつらぎ」主宰 森田純一郎先生 指導

令和五年一月二十一日

兼題 当季雜詠五句

選者吟

神饒田一隅に芹見つけけり

大寒のテレビ南国映しけり

煤逃の茶房アクリル板ばかり

万博を待つ大阪に大初日

ワクチンを打ち大寒の街に出づ

いなづま句抄

○仲の良き家族にひとつ福袋

○墨の香の馥郁として年明くる

○阪神忌君は焼け逝く物の中

○暮跳ねてまだ残照の五日かな

○寒燈や一人留守居の駐在所

○不滅の灯燃ゆる公園阪神忌

○囲はれの身の寒牡丹息づけり

○参拝の列とはべつに焚火の輪

○初寝覚いつも通りの起床かな

○靈泉の流れに沿ふや恵方径

○鹿せんべい持つ子は鹿を恐れけり

○鹿せんべい持つ子は鹿を恐れけり

○鹿せんべい持つ子は鹿を恐れけり

(○印選者選)

(注)

神饒田(しんせんでん)・神に供えるお米を育てる田んぼのこと、新嘗祭などの祭典にお供えされる

煤逃(すすにげ)・新年を迎えるために煤払をするが、その掃除の足手などなるのを避け、時間をぶしに家の外に出でしまうこと(季語)

馥郁(ふくいく)・よい香りがただよっているさま

阪神忌(はんしんき)・二十八年前、一月十七日に起った阪神・淡路大震災をさす

寒牡丹(かんばたん)・もともと初夏の花である牡丹の花芽をつみどつて冬に咲かせる

ようやく、藁囲いをして、寒さの中で大輪の花を咲かせる(季語)

寒燈(かんとう)・冬の夕暮とともに灯されている灯のこと(季語)

寒牡丹(かんばたん)・地下から自然に湧き出で来る靈験あらたかな泉のこと(「泉」季語)

初披講(はつひこう)・新年初めての句会(初句会)で選句用紙を集めて披講者が読みあげること(季語)

靈泉(れいせん)・地下から自然に湧き出で来る靈験あらたかな泉のこと(「泉」季語)

(初句会)で選句用紙を集めて披講者が読みあげること(季語)

靈泉(れいせん)・地下から自然に湧き出で来る靈験あらたかな泉のこと(「泉」季語)

靈泉(れいせん)・地下から自然に湧き出で来る靈験あらたかな泉のこと(「泉」季語)

靈泉(れいせん)・地下から自然に湧き出で来る靈験あらたかな泉のこと(「泉」季語)

靈泉(れいせん)・地下から自然に湧き出で来る靈験あらたかな泉のこと(「泉」季語)

靈泉(れいせん)・地下から自然に湧き出で来る靈験あらたかな泉のこと(「泉」季語)

他俱楽部案内

清交社の午さん講演会のご案内

会場: ANAクラウンプラザホテル大阪
五階ガーデンルーム

時 間: 十一時三十分～十三時三十分

三月七日(火)
講題『世界45の国と地域を取材して』
毎日放送アナウンサー

三月十四日(火)
講題『大相撲よもやま話』
日本福祉大学教授・放送ジャーナリスト
(元 NHKアナウンサー)

三月二十一日(火) 祝日休会
三月二十八日(火)
講題『未定』

京都大学大学院医学研究科
発達小児科学教授
滝田 順子さん

◆出席ご希望の方は、当俱楽部事務局(更谷)に一日前までにお申込み下さい。

◆会費/三,〇〇〇円(昼食代消費税込後日精算)
前日の午後五時以降は、キャンセル料が発生します。

☆ネクタイ着用用

立春開催となつた今年の一月の例会、四勝一ドボンの平幕優勝で終幕。三年ぶりに例会優勝となりました。

喜んでばかりはいられない、試合開始前の心境は、アベレージ一三の実力では七キュー十一点の条件では一勝も見込めない。そこで心掛けたことは、チャンスに失敗なく継続得点を目標に競技することでした。対戦相手の上級者の方々に「チャンス残り玉」をいただき他力本願の試合ながら終わつてみれば五戦四勝に…。

玉を散らすのは得意技?を封印し、集める技量の習得に励みアベレージ倍増を目指したいと思います。今後のご指導をよろしくお願ひいたします。

(次回例会は三月四日(土))

◎撞球部 例会(一月四日)

成績
二位 優勝 上田 豊治君
三位 雜賀幹人君
四位 大竹一夫君
五位 池端博君
(参加者 十六名)